



はぐくみ

《学校教育目標》 ゆたかな心とたくましい体をもつ子どもの育成

立花北小 校長室だより

令和6年3月11日発行
No.12「3.11東日本大震災から13年」
発行者：校長 佐野 正信

命について考えましょう ～東日本大震災から13年～

今から13年前の3月11日、兵庫県の多くの中学校は卒業式でした。ちょうど阪神淡路大震災の年に生まれた子どもたちが中学校を巣立っていったのです。と、まさにその日の午後でした。東北から遠く離れたこの尼崎でも、ゆったりとした揺れが長く続くあの大地震が起こったのでした。その後、尼崎から宮城県気仙沼市へ復興支援に向かった同僚が、現地の被害の大きさに言葉を失って戻ってきた際、現地の小学4年生男子が書いたという一つの詩を持ち帰ってきました。

ありがとう

菊田 心

文房具ありがとう

えんぴつ、分度き、コンパス大切にします

花のなえありがとう

お母さんとはちに植えました

花が咲くのが楽しみです

うちわありがとう

あつい時うちわであおいでいます

くつをありがとう

サッカーの時とつてもけりやすくて

いっしょうけんめい走っています

クッキーありがとう

家でおいしく食べました

さんこう書ありがとう

勉強これからがんばります

図書カードありがとう

本をたくさん買いました

やさそば作ってくれてありがとう

おいしくいっぱい食べました

教室にせん風機ありがとう

これで勉強はかどります

応えんの言葉ありがとう

心が元気になりました

最後に

おじいちゃん見つけてくれてありがとう

さよならすることができました

く河北新報社『ありがとうの詩』よりく

その年の夏、私は一人夜行バスにとび乗り、東北に向かいました。目的は、①被災地の現状を自分の目で見ること ②被災地の方々のお話を伺い、思いを感じる事 そして、③詩の作者である菊田心さんにお会いして話を伺うこと…の三つです。



最初に訪れた福島県南相馬市の仮設住宅では、地元の漁師さんとお会いし、長年大切に守ってきた海を放射能で失ってしまったやるせない気持ちを伺いました。多くの命が失われた宮城県石巻市の大川小学校では、自分だったら何ができていたのだろう…と思いを巡らせながら北上川の堤防や学校の裏山を実際に歩いてみました。岩手県陸前高田市では、被災した高田高校の体育館天井を見上げながら15mを超える津波のすさまじさを思い知りました。そして、最後に訪れた宮城県気仙沼市では、被災地訪問の一番の目的であった菊田心さんとお母さんとの面会が叶い、お話を伺うことができました。

心さんのおじいちゃんは、工場を営むスポーツが得意なスーパーいいちゃんだったそうです。地震の後、バラバラだった家族が顔を合わせて無事を喜び合ったとき、そこにおじいちゃんの姿だけがありませんでした。元気なおじいちゃんのことだから、そのうちいつか戻ってくるに違いないと信じて待ち続けました。地震の直後、おじいちゃんは、心さんに将来あげると約束していたバイクを保管していた工場へ、バイクの無事を確かめに行かれたのでした。すっかり落ち込む心さんでしたが、その後、全国から支援物資や励ましのメッセージが毎日のように届き、少しずつ元気を取り戻していったそうです。そして、地震から二ヶ月ほど経ったある日、ようやくおじいちゃんが見つかったという知らせが入ったそうです。見つけたのは、遠く九州大分県から支援にやって来ていた自衛隊の隊員さん達でした。心さんは、涙がいっぱい出ましたが、大好きだったおじいちゃんときちんとお別れすることができたそうです。

震災から13年、大切な人を失った方の中には、今も時間が止まったままの方もおられるそうです。同じ震災を経験した者として、3.11は、東北の方々に思いをはせる一日でありたいと思います。そして、いつか来る日にむけて備えたいものです。